

誰一人取り残さない学びの保障に向けて

学校長

10月末に文部科学省から、「令和5年度不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」の結果が公表されました。結果から、不登校の児童生徒の数が34万人余と11年連続で増加し、過去最多となっていることがわかりました。34万人余は、割合で見ると3.72%だそうですが、中学校に限ると6.71%になり、40人の学級に当てはめると2～3人の不登校生徒がいる状況になります。このことから、多くの生徒が学校生活や友人関係、学力不振などにもがき苦しんでいる現状が報道されていました。

コロナ禍の一斉休校期間中、学校生活や学校そのものの存在意義等について、様々な側面から議論が起こっていたことを覚えていらっしゃるでしょうか。少し前になりますが、その頃、長くなった休校期間での気付きについて投稿した14歳の生徒の記事を紹介します。

学校ですることが家でも個人でもできるなら、わざわざ通学する意味は何だろう。今、学校生活と大きく違うのは「嫌い」なものに触れなくなった点だ。学校に行けば苦手な人と顔を合わせ、嫌いな教科も学び、時に退屈な時間を過ごすこともある。でも、その苦みや雑味も含めた日々は、何にも代えがたい味わいがある。

好きなことばかりを選び取るのは良くないこと。学校では勉強だけでなく、人との関わりや課題を乗り越える力、生きていくために必要な力を学ぶのだと、休校体験から気付いた。余裕がなく、騒がしくて息苦しいほどのあの日々が愛おしく、また今を少し物足りなく思っている。 (令和2年3月20日「朝日新聞“声”欄」より一部抜粋)

もちろん「嫌なことがあっても登校すべきだ」との視点で、この記事を紹介したのではありません。こんな思いで学校生活を過ごしてくれたら、多くの生徒にとって毎日はどんなに輝きワクワクするものになるだろうと、日々「余裕がなく、騒がしい」学校教育に携わる側から、本校がそんな何にも代えがたい存在であってほしいという願いを込めて紹介させていただきました。

文部科学省では、「不登校により学びにアクセスできない子供ゼロ」を目指し、不登校に特化した「学びの多様化学校」の設置やフリースクールとの連携強化を進めています。本校でも長期の欠席が続いている生徒には、タブレット等を活用した学びの場を確保したり、学校に関わる機関等での専門的な相談・指導等を受けられるよう支援したりと、本人や保護者に必ずしも学校復帰が前提だと条件を付けたり、余計なプレッシャーを与えたりすることなく、今後も多様な支援が行き届くように努めて参ります。

それでは、今年一年、本校の教育活動にご協力いただきありがとうございました。心より感謝申し上げます。新しい年が皆様にとってよいお年となることをご祈念申し上げます。